

## 論文審査の結果の要旨

論文題名 『源氏物語』を現象させる言葉についての研究

本論文全八章は、平安時代の仮名文字テキストのなかで、『源氏物語』が初出である言葉、もしくはそれに多用されている言葉に注目することで、物語の構造を明らかにしようとしたものである。

序章「本論文の問題意識、研究意図」と第一章『源氏物語』における初出の言葉および多用される特殊な言葉では、『源氏物語』が平安時代の他の仮名テキストに比して、著しく動詞・形容詞・形容動詞が多いという指摘から入る。例えば、分量にして『源氏』の三分の二程度の『うつほ物語』の場合、名詞の使用頻度は『源氏』より多いにもかかわらず、動詞・形容詞・形容動詞の使用となるとはるかに少ない。ここから、『源氏』という仮名テキストの位相がまずは見通される。そして、吉村氏は『源氏』における名詞以外の自立語のうち、約三〇〇語の初出語を抽出し、それらを「複合語（約二五〇語）」、「豊語（約一一〇語）」、「それ以外（約四三〇語）」の三つに分類する。「複合語」は、「うち+〇〇」「そら+〇〇」という接頭語付加によるもの、「思ふ・聞く・言ふ」を語頭につけるもの、「泣く」を語頭につけるもの、「～顔なり」形式、そして「人笑へ」系のものとなる。「豊語」は、全二六〇語のうち初出語が一〇語もしめており、『源氏物語』の特異の表現方法とする。「それ以外」は、既存の接尾語を付加して、品詞を変更させて活用した語が該当する。以上の実証的作業をふまえて、第二章以下が展開される。

第二章「感情表現「笑ひ」について」は、「わらふ」系、「ゑむ」系、「ほほゑむ」系の三種に分類し、同時代の仮名テキストの中で、『源氏物語』では、「ゑむ」系（六九例、二五％）、「ほほゑむ」系（六九例、二五％）の使用比率が著しく高く、とくに「ほほゑむ」は『源氏物語』以前にはほとんど用例がないと指摘するとともに、その「ほほゑむ」の意味を「ゑむ」と弁別したうえで、主人公光源氏に集中的に使っているという、この物語固有の人物造型の方法を明らかにしている。

第三章「感情表現「泣き」について」は、全部で六六四例、一八一種類の「泣き」表現があるとし、声をたてる「泣く」系（三五種）、声を立てない「涙」系（六八種）、「その他」の三つに分類する。そして「泣く」は圧倒的に女性に使われる言葉であるとし、さらにいかなる原因によるかという観点から、「（自己・他者に対する）憐憫」と「（自己・他者に対する）賞賛」という弁別基準のもとに、「泣く」系は前者に集中するのに対して、「涙」系は「他者に対する賞賛」によるものが突出して多いと説く。とくに「涙」系は、六八種の表現数のうち一回限りの表現は四八種にのぼり、ここにこの物語ならではの特徴があるという。また自動詞「涙落つ」（十六例）と、他動詞「涙落とす」（十三例）の使い分けの問題を俎上へのせ、使用法に混乱のある他の仮名テキストに比して、『源氏物語』では、「涙落つ」が、自己のための内向きの涙であり、「涙落とす」が他者のための涙であり、かつ「涙落つ」が思わず落ちた涙という意味

傾向が強くとする。そして、以上の分析結果をふまえて、源氏・朱雀院・夕霧・柏木・薫・匂宮・紫の上・末摘花・浮舟の人物造型上の問題点を論じている。

第四章「かをる」と「にほふ」については、『源氏物語』には四一例もある「かをる」だが、『源氏』以前には仮名文の使用例は六例しかなく（いずれも嗅覚の「香がたつ」という意味）、漢文・漢詩を訓読する際に使うのが一般であり、一方「にほふ」は、「赤く照り映える」「美しく染まる」という『万葉集』以来の視覚的表現を原義として、平安時代に入ると、嗅覚的現象にも使用される言葉であり、その意味からも、『源氏物語』は語源のまったく異なる双方を同一線上に位置づけているとする。さらにその双方が文脈上互換的に使用されていることを論じ、そのことと、「薫」「匂宮」（『源氏物語』続編「宇治十帖」の二人の主人公）という対的人間関係にみる交換可能性という問題とが連動していることを証明している。さらに「飽かざりしにほひ」という古来より物語注釈史上不明であった箇所を、先の分析をふまえて試みている。

第五章「あえか」については、「あえか」が『源氏』に十八例、『紫式部日記』に三例あるも、以前には皆無であり、なぜこの言葉が発生したのかの問題を説き、さらには、その語義や近接する言葉との関係を明らかにしながら、男性には使用されず、夕顔・秋好中宮・女三の宮・落葉の宮・宇治の大君、という女君たちを特徴づける言葉として機能している点を証明している。また、『紫式部日記』では小少将の君という式部が懇意にしている上藤女房を形容する言葉である点に着目して、現実世界から物語世界への転移の実態を測る言葉としても位置づけている。

第六章「光源氏を絶対化する言葉について」は、「いつかし」「～顔なり」「かろがろし」「涙落とす」という言葉から光源氏像に多面的に接近する。「いつかし」が光源氏と冷泉帝にしか使われていないことを論じ、「～顔なり」については、このような形式の複合語は他のテキストにあるも、『源氏物語』では、五十語余りが初出語であり、しかも光源氏の靈威に感応する自然を擬人化しての表現が多いという。また、光源氏に集中的に使われる「かろがろし」（「かろし」の疊語）は、身分が高いにもかかわらず、不相応に軽率・軽薄であることを表す言葉であり、あえてこれを源氏に対して使うことで、物語内部に源氏を批判的に扱う視座を確保し得たという。また、「涙落とす」については、それが光源氏を礼賛する周囲の言葉である点を実証している。

第七章「罪」と「恥」に関わる言葉については、物語中の「罪」（一八〇例）の六分類を試みたうえで、源氏と藤壺の王権侵犯の「罪」意識の何たるかを、「おそろし」「そらおそろし」という言葉から照射し、さらに女三の宮と密通する柏木の造型にあっては、もはや「そらおそろし」は使われず、「おそろし」「はづかし」「そらはづかし」「おほけなし」が多く使用されていることから、そこに「罪」意識の変容を認めている。また、浮舟が入水を決行する際には、もはや「罪」ではなく、「人笑へ」「人笑はれ」という「恥」の問題が浮上してきているとし、『源氏物語』最後の世界の何たるかをとらえんとしている。

本論文は、『源氏物語』を資料としての国語学的研究ではない。国語学的な文献処理法を用いてはいるが、『源氏物語』の言葉を介して、物語の世界がどのように構築されているかを明らかにしたものである。このような研究にあっては、どの言葉に着目したかが最大の勝負であ

り、それ以外にない。見通しがきかないところがあり、頻出する言葉が良いのでなければ、初出語が必ずしもこの物語の特性をあらわしているのでもない。本論文で俎上にのせた言葉にたどりつくまで、吉村氏は多くの失敗を繰り返してきたものと思われる。一見して、有力な語と判断されても、個々の用例を検証すると、なんの問題も発見されないというケースの方がはるかに多い。しかも、言葉を入りに『源氏物語』の世界を解明するにしても、各々の言葉のもつ射程範囲は様々であり、したがって、『源氏物語』総体を体系的に把握するのはなかなか難しい。

本論文でもっとも成功しているのは、第四章の、『日本文学』誌に掲載された「かをる」と「にほふ」についてである。「かをる」と「にほふ」が元来語源を異にした言葉であるにもかかわらず、同一レベルの言葉として、『源氏物語』が初めて双方を互換的に併用したという指摘はもとより、そのことが、続編「宇治十帖」の薫と匂宮という分身関係の孕む互換性と対応しているという瞠目すべき見解を提出している。言葉の使用法から物語の構造それ自体を抽出するに成功した例だった例として高く評価される。

第二章の論も良質である。「ほほゑむ」が光源氏についての使用例が殆どで、しかも極めて多義的に用いられているという指摘は独創的である。ただし、だとするならば、光源氏の造型論としてさらに論じ得る余地があったかもしれない。吉村氏は、第六章で、幾つかの言葉から光源氏像に多面的に照明をあてているが、それら以上に、この「ほほゑむ」の使用こそが光源氏という怪物的人物像の形成を可能ならしめたのではないのか。物語自体が、「ほほゑむ」を謎めいた言葉として戦略的に多用することで、光源氏像にうかがい知れない不気味な奥行きを付与するに成功しているのではないのか。

その他、第一章の『源氏物語』の初出語すべてを実証的に叩き出した労作も評価できるし、第三章の感情表現「泣き」についての論もきわめて妥当である。朱雀院像について「しほたる」「うちしほたる」という言葉が多いという指摘や、紫の上にあつては少女時代は「泣く」、二十代以降は「涙」が主流となる等、人物造型の方法論としていかに「泣き」表現が有効に機能しているかを実証している。第五章の「あえか」も好論だが、『紫式部日記』の小少将の例と物語世界の例との関係論は、日記世界が既にして物語的幻想で統御されている以上、いわゆる現実と虚構世界との関係論というありきたりの軸で解消できるような問題なのであろうか。また、高貴な姫君たちの中で夕顔にも使われているというこのバランスの悪さは何を意味するのか。第六章は、光源氏を評価する言葉として、自然界や周囲の人物の言葉、そして語り手が彼をどうとらえているかという多角的な視線の所在を探り当てており、言葉の使用法から物語空間論をたちあげている点が斬新である。第七章は、いまさらながらの「罪」問題という感じがなくもないが、あらためて源氏の「罪」の何たるかを明確にし、かつ「罪」意識の変容を言葉の問題から実証している点が評価される。

『源氏物語』の研究は、成立論・構想論・主題論・作者論・語彙論・構造論・表現論・引用論・語り論…、とさまざまであり、とくに最近の研究では、『源氏物語』を素材にしての新たな文学理論の構築を目指すものすら登場してきている。これは源氏研究が一種の飽和状態にあることを意味するが、にもかかわらず年に約二百本の轟立った『源氏物語』論がいまだ生産されつづけているのが現状である。そういう中であつては、吉村氏の研究にはいかにも古色蒼

然たるものがあるかもしれないが、このような研究は、国語学と文学研究の二股をかける必要があるためか意外にも少なく、国語学者山口仲美氏による一連の論文があるのみである。しかも、本論文は、従来の源氏物語研究史が関知し得なかった言葉についての多くの知見を呈示しており、またそのことにより、このような研究法の可能性を改めて我々に開示してくれてもいる。

以上を以て、吉村研一氏の論文が博士（日本語日本文学）の学位にふさわしい業績であることを審査員全員一致で承認した次第である。

以上

論文審査委員： 主査 神 田 龍 身 教授  
鈴木 建 一 教授  
陣 野 英 則 特別非常勤講師  
(早稲田大学文学学院教授)